## 小 倉藩の東北 出兵

倉藩の奥羽出兵 より出る 慶応四年 兵の (一八六八) 要請 品があり、 月十 小倉藩は H 新

政

府

わたって藩兵を京都に派遣した。

藩の船で船団

を構成して、

沓

尾港 を経て六月十八日には秋田に到着して、 がって、 閏四月二十六日に佐賀藩兵とともに英国 こで江戸守衛軍下に配属され、 は、二十六日京都を出発、 を上って十二月十三日京都に帰還して、 薩長の部隊と合流した。 五月十日仙台に到着した。そして奥羽鎮撫使の九条道孝にした 台の各藩兵と交戦した。 関 従 警衛に当たっていた。 美夜古文化』 庄内藩 軍 月十九 東二ノ手援兵」として京都で編成された平 (現行橋市)から出航した。 記 (一八六九) 庄内藩追 録 八日東京 0 (鶴岡) 械 一参照)。 略 討のために出発 (五月十八日)、 であ 一月八日のことであった。 (七月改称)に戻った。 が十月に降伏したので、 る やがて奥羽方面 院内口より進攻して、 主な交戦地は、 (友石孝之「小笠原藩 四月十八日には江戸に到着した。 江戸 そして三月十九日大坂にて、 城西丸、 香春に帰藩したの 雄物 副総督沢為量指 [船にて横浜を出 へ転戦を命じられた。 そして、 山 川上 坂下門、 以上 庄内・ 形、 の奥羽出 井小左衛門隊 南部 流 陸 が、 福島を経 路 帯 秋 金座など (盛岡) 平井隊 兵、 であ 揮 東 田 は明 海 下 そ 道 仙 0 合 7 つ

## 高 木悦蔵隊の活躍

監督するために監軍を置き、 M 撫総督 府 は 征 一討軍の士気の 征討軍に対 低下などを

たのであろう 体験が彼をして角館兵小隊の指揮という名誉を担うことになっ 高木は小倉兵沼田隊の隊士、 内村から退却を強いられたと報告した。 が三〇人ばかりの は注目に値する。 頁参照)。 た軽輩の士であるが、 倉藩士高木悦蔵が秋田藩の角館隊の指揮官となってい なして旗を捨てて退いたために、 して厳しい態度で臨んだ。 このように、 (宇都宮泰長 敵兵 長州藩と戦った第二次征長戦以来の 別の (仙台兵を中心とする同盟軍) 八月二十三日 『忘れられた九州人』一一 藩兵の指揮官となって戦ったこと のち使役鎌田英三郎の支配にあ 大村・小倉藩兵はやむなく斉 そのためか翌日から小 の戦いで、 九、 角館 た のだて に恐 る。 一二七 実戦 この 藩兵

## 久我隊と小笠原藩兵 羽州戦

9

下の者たちが帰藩し 救援部隊があった。 この隊には、 た後にも、 ため、 京都で七月末に急ぎ編成され 線 大坂市中の警衛に当たっ 小倉藩からは島村志津 (九条総督) が苦境 に陥 の配 た た

者が投入され

た。

京に着いた。 九月二十 新発田 五日 一四日、 には 村上を経て、 同 一地を出る 久我卿は薩摩・ 発、 十月三 米沢、 一日庄内鶴岡に入り、 小倉藩兵を率い 福島を経て、 て新潟 月二 城を接収 を 進 Ħ 発

京都 0) 軍務官 の届出は次のとおりであった。

人数頭 (備頭) 人 (小笠原若狭

小隊長

手負い 銃隊 二人 二百六十六人

役用 病人 七人 約十八人

三百二十人

この隊は、

羽州戦線の苦戦の救援隊として、

九

る。

(友石孝之前掲書参照

このとき、すでに東北征討戦の終了を船中で知らされた。上陸 に藩兵三五〇人が乗船、 成された。 定であったが、天候が悪く門司浦での乗船となった。十月二日 助隊の出兵 渋田見縫殿 最初は、 月六日に急ぎ秋田出兵を命じられて、香春で編 政府差し回しの軍艦で沓尾浦から乗船の予 十月七日新潟に到着した。ところが、

の後、 田黒に随行し、 新発田の総督府に指揮を仰ぐ隊士の生駒主税は軍務官太 会津城下の警衛を仰せつかった。 渋田見隊の編

頭 一人(渋田見縫殿助、 もと渋田見 新 成は次のとおりであった。

小隊長 六人

銃 隊 三百十人

役 Þ 三十九人

> その他総計 四百十七人

会津警衛を終え、この隊は翌明治二年(一八六九)三月十七

日と二十七日、 二班に分かれて帰藩した(友石孝之前掲 書

照)。

の 小笠原若狭隊 活 越後方面の戦いは最も熾烈であった。この方 面の主力部隊は、 長州藩山県有朋の率いる奇

成した河井継之助の率いる長岡藩兵に苦しめられたからであ られた戦いであった。特に、小藩ながらも洋式の精鋭部隊を編 兵隊を中心とする精鋭部隊であった。 しかし、大変苦戦を強

して、 され、 出兵に変更された。新政府のこの要請に基づいて、香春で編成 への巡航を願い出た。小倉領内沓尾浦に巡航された軍艦に乗船 よとのことであったが、七月二十七日に越後方面救援のための 小笠原若狭隊は最初、 軍艦が下関に派遣されることになっていた。 八月十七日出帆した。 七月九日の命令では 羽 州 藩は沓尾浦 出兵」 せ

頭 一人(小笠原若狭

このときに乗船した小倉藩兵は次のとおりであった。

小隊長 六人

役 二十四人

銃 隊 二百五十人

其外夫方 四十余人

計 三百二十一余人

た二分隊に分けられ、一隊は野沢口に、他の一隊は滝谷を通 兵衛が率いて津川口から会津をめざした。津川口で春日隊はま 狭みずからが小隊を率いて米沢口に進み、 後総督府の指揮下に若狭隊は編入された。 会津高田まで進攻、 て坂瀬川を進み、米沢村、 この隊は同月二十五日、 京都帰還は十一月九日であった(友石孝之前掲書参照)。 その時点で止戦となった (十月七日)。そ 雀林村、 柏崎に到着した。八月二十八日に越 寺崎村を経て、交戦しつつ 他の一 その作戦に従 小隊は春日又 若

## 第 应 節 豊津 藩 の成立

版 朝廷はこれを許可した。旧藩主は新政府から知藩事に任命 籍 奉 明治二年 版籍を奉還する形をとり、 (一八六九)六月に薩長土肥の四藩主 諸藩もこれになら

轄にすることを決定した。しかし、 ともに朝廷に返還した。そこで、香春(小倉) して企救郡の返還を願い出たが実現しなかった。 企救郡の年貢収納分を政府の国庫から下げ渡すことを通達して 長州藩は、 香春藩はこれを辞退した。 第二次長征戦争に占領した企救郡を本来の領 版籍奉還後も日田県の実質 企救郡は、 結局日日 藩は新政 そのか 田 『県の管 わり、 府に対 地と

> 的移管はなされず、依然として長州藩が管轄していた。そうし た中で、 明治二年に企救郡の百姓一揆が発生した。

は日田県の管轄になった。 明治三年(一八七〇)、長州藩は企救郡から引き揚げ、 同 郡

豊津藩の成立

した。 ら同地での藩庁建設が行われ、冬には藩主の館が完成して、 一月二十八日に田川郡の正福寺から十代藩主小笠原忠忱が転居 明治元年(一八六八)十一月に藩庁を仲 錦原に移転することが決定され、 津 郡 か

不作に対応した。 中原は、 から、蔵米を放出したり、会計局の中原嘉左右(小倉城下町 人・藩御用達・飛脚問屋) 納が不作であったこともあり、 た豊津藩の成立である。 翌明治三年「公廨御上棟」(坂本家文書「(仮題) 肥後・長崎・ 下関などから食糧を確保して、 前年の明治二年は、 に命じて食糧の確保にあたらせた。 領内で食糧が不足がちであった その前年の 年代記」) 同二年の の収 し 商

記録には次のように記されてい この年の不作は、天候不順によるものであった。

珍敷き不順天気に御座候事尤も十月四日雨天に候事(前掲坂本家文書) 七日より晴天打続き十月三日まで四十三日皆 同月十五日晴天に相成り、 (明治二年) 五月十七日より雨天打続き八月十一日まで降り続 九月十六日皆 侠 快 晴同夜中大雨 晴打続き、